The Day of Days

（すべての日の中の日）

マタイによる福音書7章7節の光における人間の実存的探求

永遠の父（Abi Ad）の扉を求め、願い、たたく存在としての人間

著者：Martin Oman

要旨

この省察は、著者の両親が人生の大切な日々を、マンガライ語の意味深い表現「Ho’o Leson」（「これがその日である」）によって受け止めていたことから生まれた。

人間は、自分の存在の意味を理解する以前に、存在そのものを与えられている存在である。人間は、自ら選んでこの世界に来たのではなく、支配することのできない時間を受け取り、有限性と、自分を超えるものへの憧れとの緊張の中で生きている。

人間の実存は、根本的な問いへと導く。なぜ私は存在するのか。何のために生きるのか。私の存在は誰に向かっているのか。

本稿は「The Day of Days（Hari Segala Hari）」を、人間が存在を単なる事実ではなく、自らを探求へと招く神秘として経験する時として展開する。それは暦の一日ではなく、人生が賜物であり召命であることに目覚める意識の瞬間である。

> 「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見いだす。門をたたきなさい。そうすれば開かれる。」

聖書神学の観点から見ると、マタイ7章7節は、特定の願いについてだけ語っているのではない。それは、人間と神との関係の最も深い動きを示している。人間は満たされることを求めるために探し、有限性を知るために願い、神が自らを開いてくださると信頼するために門をたたく。

著者は人間を homo quaerens――「探し求める人間」と理解する。しかし、その探求は方向のない旅ではない。それは存在の源であり目的である神、すなわち永遠の父（Abi Ad）として示される神へ向かう。

Abi Adという概念はイザヤ書9章6節に根ざしている。

> 「ひとりのみどりごが私たちのために生まれた。ひとりの男の子が私たちに与えられた。権威がその肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」

聖書の光の中で、Abi Adは、時間を超え、生命の源であり、民を守り、人間の旅の究極的な目的となる神を示す。

本省察は、神の前に立つ個人についてのキルケゴール、存在の神秘と希望についてのガブリエル・マルセル、そして無限なる神への人間の開かれについてのカール・ラーナーと対話する。

詩編90編の光の中で、人間は自らが死すべき存在であることを学ぶ。日々は短く、力は限られ、人生は朝に生え夕べに枯れる草のように過ぎていく。しかし人間の有限性は空虚に至らない。なぜなら神が永遠の住まいだからである。

> 「主よ、あなたは代々にわたって、わたしたちの住まいです。」（詩編90編1節）

したがってThe Day of Daysとは、「なぜ私は存在するのか」という問いが、「私は誰から来て、誰のもとへ帰るのか」という、より深い問いへ向けられる瞬間である。

その答えは、永遠の父（Abi Ad）との出会い、すなわち人間に求め、願い、門をたたくよう呼びかける神との出会いに見いだされる。

キーワード

The Day of Days、Hari Segala Hari、マタイ7章7節、聖書神学、人間の実存、探求、homo quaerens、Abi Ad、イザヤ9章6節、詩編90編、キルケゴール、ガブリエル・マルセル、カール・ラーナー。

主要命題

人間は単に存在するだけの存在ではなく、自らの存在の意味を探し求める存在である。

人間の存在は自分自身から始まるのではない。人間は生命を賜物として、時間を恵みとして受け取り、人生の最も深い目的を見いだす召命を受けている。

著者によれば、人間には三つの主要な実存的運動がある。

1. 人間は探す。真理、愛、そして生命の充満への憧れが内にあるからである。

2. 人間は願う。自分が有限であり、すべてのものの源である方を必要としていることを知るからである。

3. 人間は門をたたく。生命の神秘の扉の向こうに、自分の声を聞き、自らを開いてくださる神がおられると信じるからである。

マタイ7章7節は、人間の探求が空虚に終わらないことの聖書的基礎となる。神は閉ざされた現実ではなく、人間を関係へと招く父である。

人間の探求は、最終的に自らの存在の源へ帰る旅である。

序論

存在が問いとなる日

いつものように過ぎていく日々がある。太陽は昇り、沈む。時間は音もなく進む。人間は働き、未来を計画し、喜びと苦しみを経験し、人生の旅を続ける。生活の大部分は習慣の中を流れていく。しかしある時、人間は立ち止まり、最も単純でありながら最も心を揺さぶる事実に気づく。「私は存在している。」

この気づきが、人間の探求の始まりとなる。人間は単に生きる存在ではない。自分自身の人生の意味について問うことのできる存在である。

なぜ私は存在するのか。なぜこの生命を受けたのか。私の人生の旅はどこへ向かうのか。この地点にThe Day of
Daysが現れる。それは暦の日付ではなく、存在そのものが自分自身にとって光となる瞬間である。

聖書神学の光の中で、人間は自分自身の起源ではない。創世記はこう述べる。

> 「主なる神は土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。こうして人は生きる者となった。」（創世記2章7節）

人間は塵から生まれるが、神から命の息を受ける。死すべき存在でありながら永遠を慕い、有限でありながら無限なる方を求める。

> それゆえ人間は探し求める存在である。その探求は神の招き、「求めなさい、探しなさい、門をたたきなさい」（マタイ7章7節）によって方向づけられる。

探求は単なる知的活動ではなく、人間全体の最も深い運動である。人間は人生の初めから、自分が誰であり、どこから来て、どこへ向かうのかを理解する旅にある。

この探求は、人間が自分自身だけでは決して完全に終わらないことを示す。達成、知識、富、世俗的経験だけでは満たせない空間が内にある。人間の深みに、自分より大きなものへ向かう憧れがある。

著者の省察では、人間は homo quaerens——探し求める者——と呼ぶことができる。

しかし人間は探すだけではない。願う者でもある。願うことは、自分自身が存在の究極的な源ではないと認めることである。能力と力の背後で、人間はなお生命の与え主に依存している。

そして人間は門をたたく者である。門をたたくとは、自分の外に扉があることを認めることである。人間は神秘の前に立ち、その神秘が空虚ではなく、迎え入れてくださる人格的な存在であることを希望する。

この三つの運動——探す、願う、門をたたく——は人間の最も深い構造を表している。人間は真理を探し、生命を願い、永遠の扉をたたく。

聖書神学において、人間の探求は人間自身から始まるのではなく、先に人間を呼ばれる神から始まる。神は人間の探求の究極の目的であるだけでなく、探求したいという人間の憧れの源でもある。

2. マタイ7章7節——人間の探求の聖書的基礎

イエスのマタイ7章7節の言葉は、The Day of Days全体の主要な基礎である。

> 「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見いだす。門をたたきなさい。そうすれば開かれる。」

この節は、父としての神と人間との関係についてのイエスの教えの中に置かれている。神は遠く離れ、人間に無関心な非人格的な力ではない。知り、聞き、与えてくださる父である。

イエスは、人間の能動的な運動を表す三つの動詞を用いる。願う——有限性を自覚して神のもとへ来ること。探す——真理と神の御心へ向かうこと。門をたたく——扉を開いてくださる神との関係に入ること。

Martin Omanの視点では、これらは単なる宗教的行為ではなく、実存的行為である。人間の全人生は、探し、願い、門をたたく過程である。

人間は意味を探す。恵みを願う。永遠の扉をたたく。

マタイ7章7節は、人間の探求が空間の空虚へ落ちるのではないことを確信させる。人間の問いの背後には答える神がおられ、ノックの背後には開く神がおられ、憧れの背後には迎える父の愛がある。

3. イザヤ9章6節のAbi Ad（永遠の父）——人間の探求の目的としての神

人間の探求の頂点は、神を永遠の父（Abi Ad）として知ることにある。

イザヤの預言は述べる。

> 「ひとりのみどりごが私たちのために生まれた。ひとりの男の子が私たちに与えられた。権威がその肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」（イザヤ9章5–6節）

Abi Ad（אָב ׳ עַד）は二つのヘブライ語要素から成る。’Abi（אָב ׳）は父、源、養い手、生命の与え主に関係し、’Ad（עַד）は永遠、終わりのない持続を指す。

イザヤの文脈では、この称号は約束された方を通して実現する神の永遠の支配の約束に関係する。省察的には、人間の存在の起源であり目的である神への理解を開く。

人間は時間の中に生きるため有限性を経験する。神は時間を超えるため充満である。人間は変化するが、神は堅固な基礎であり続ける。

したがって、永遠への人間の憧れは人間にとって異質なものではない。それは、人間が永遠なる方へ向けられているしるしである。

著者の枠組みでは、Abi Adは人間の旅の究極的な目的である。人間は単なる答えを探すのではない。「答えそのもの」である方を探す。単に永遠なものを探すのではなく、永遠そのものである方を探す。

4. 詩編90編――人間の有限性と永遠の住まいとしての神

Abi Adへの気づきは、詩編90編の光の中でさらに明確になる。この詩編は、時間、死、そして神の永遠性についての深い省察である。

詩編作者は言う。

> 「あなたは人を塵に帰し、『人の子らよ、帰れ』と言われる。」（詩編90編3節）

人間は有限である。日々は過ぎ、力は衰える。自分の意志だけで人生を延ばすことはできない。しかし詩編90編は有限性だけで終わらない。弱い人間について語る前に、詩編作者は宣言する。

> 「主よ、あなたは代々にわたって、わたしたちの住まいです。」（詩編90編1節）

ここに聖書的希望の中心がある。人間は長寿そのものに安全を見いだすのではなく、永遠の神のうちに安全を見いだす。

したがって、「生涯の日を正しく数えることを教え、知恵ある心を得させてください」（詩編90編12節）という祈りは、単に死を意識するためだけの祈りではない。神の前に正しく生きるための祈りである。

日々を数えるとは、一日一日が賜物であり、時が恵みであり、生命が召命であることを認めることである。

The Day of Daysの光の中で、人間は日々が限られている一方、神の愛には限りがないことを見いだす。人間は時間の中に生きるが、永遠へ向けられている。塵から生まれるが、永遠の父へと呼ばれている。

5. キルケゴール――神の前に立つ個人

キルケゴールの実存思想は、人間が神の前に直接立つ人格であることを理解する助けとなる。人生の最も深い意味は、客観的思考、哲学体系、抽象的知識だけから見いだすことはできない。人間が神の前に立つときにのみ見いだされる人格的な実存の次元がある。

人間は説明されるべき世界の一部分にすぎないのではなく、呼ばれている人格である。

キルケゴールにとって信仰は、神についての概念への単なる同意ではない。信仰は、人間と神との実存的な関係である。

ここでマタイ7章7節は新しい深みを得る。人間が願い、探し、門をたたくとき、それは単なる宗教的行為ではなく、生きておられる神に自分自身を委ねることである。

願うとは、謙遜をもって来ること。探すとは、神の真理に自らを開くこと。門をたたくとは、神がそこにおられ、迎えてくださると信頼することである。

キルケゴールは、最大の問いが単に「神は存在するのか」ではなく、「私は生きておられる神の前に、どのように立つのか」であることを理解させる。

The Day of Daysとは、人間が自分を中心にすることをやめ、自分の存在が創造主との関係の中にあることを悟る瞬間である。

6. ガブリエル・マルセル――神秘としての存在と希望

ガブリエル・マルセルは、「問題（problem）」と「神秘（mystery）」を区別する。問題は人間の外にあり、客観的に分析できる。しかし神秘は人間の存在全体を巻き込む。

人間の存在は神秘である。人間は自分自身の外側に完全に立って、なぜ自分が存在するのかを説明することはできない。人間自身がその問いの一部だからである。

したがって、人間の探求は知的な答えだけでは解決できない。人間には関係、現前、そして希望が必要である。

マタイ7章7節の光では、神は人間が探す単なる対象ではない。神は人間に自らを開いてくださる人格的存在である。

人間が門をたたくのは、自分の力で永遠の扉を開ける力を持っているからではない。その扉の向こうに、聞いてくださる人格的存在がおられると信じるからである。

マルセルにとって希望は、すべてが人間の望み通りになるという単純な楽観ではない。希望とは、人間自身より大きな可能性に自らを開くことである。

Abi Adの文脈において、人間の希望には確かな基礎がある。それは永遠の神へ向けられているからである。

人間は時間の旅の中で多くのものを失うかもしれない。しかし、人生が永遠の父との関係の中にあるなら、究極の目的を失うことはない。

7. カール・ラーナー――み言葉を聞く者としての人間

カール・ラーナーは、人間を根本的に神へ開かれた存在として理解する。人間は有限な世界の中に閉じてはいない。その存在の深みに、無限なるものへの方向性がある。

真理、愛、意味への人間の憧れは、人間が超越的な次元を持つことを示す。

人間は神の啓示を受け取ることのできる存在である。

この光において、マタイ7章7節は人間存在の最も深い構造を示す。人間は神の賜物に開かれているから願い、神の真理に開かれているから探し、神の現存に開かれているから門をたたく。

ラーナーは、人間の神への探求が単に下から上へ、人間から神へ向かう運動ではないことを理解する助けとなる。それは、先に人間へ自らを開かれる神への応答でもある。

人間が神を探すのは、神がすでに人間存在の深みにおられるからである。

8. 著者による総合――永遠の父との出会いとしてのThe Day of Days

この省察全体において、The Day of Daysは単なる心理的経験や個人的な黙想の瞬間ではない。それは、人間が自分の生命に起源と目的があることを悟る聖書的かつ実存的な経験である。

人間は、自分が意味のない偶然の結果ではないことを発見する。神から来て、神の養いのもとに生き、神へと帰るよう導かれている。

著者によれば、人間は真理と充満への憧れを持つために探す存在であり、生命が賜物であって絶対的な所有物ではないことを知るために願う存在であり、存在の神秘の向こうに扉を開いてくださる永遠の父（Abi Ad）がおられると信じるために門をたたく存在である。

ここでマタイ7章7節とイザヤ9章6節が出会う。マタイは扉をたたく人間を示し、イザヤはその扉の向こうにおられる方、永遠の父を示す。

人間は存在について問う。神は現存によって答える。人間は意味を探す。神はご自身を与える。

結論

The Day of Days（Hari Segala Hari）は、人間が存在の見方を根本的に変える時である。人生はただ起こるものではなく、召命として見られる。時間はただ過ぎるものではなく、賜物として見られる。有限性はすべての終わりではなく、永遠の神へ向かう道として見られる。

マタイ7章7節の光において、人間は探し、願い、門をたたくよう呼ばれている。この探求は空虚に終わらない。神は閉ざされた神秘ではない。

神は父である。神は開いてくださる方である。神はAbi Ad、永遠の父である。

詩編90編は、日々を知恵をもって数えることを教える。キルケゴールは、個人が神の前に人格的に立つことを教える。ガブリエル・マルセルは、存在が希望を必要とする神秘であることを思い起こさせる。カール・ラーナーは、人間がご自身を現す神に常に開かれていることを示す。

これらすべての道は、一つの告白に出会う。人間は呼ばれているから探す。人間は希望するから門をたたく。

人間は永遠の父を探す。なぜなら、父のうちに存在の充満を見いだすからである。

したがってThe Day of
Daysとは、人間が自分についての最も深い問いの答えを、神との出会いの中に見いだす日である。

> 私は、あなたが呼んでくださるから存在する。私は、あなたが引き寄せてくださるから探す。私は、あなたが命の扉を開いてくださるから門をたたく。

参考文献

Kierkegaard, Søren. Fear and Trembling. Translated by Alastair Hannay. London: Penguin Classics, 1985.

Kierkegaard, Søren. The Sickness Unto Death. Translated by Alastair Hannay. London: Penguin Classics, 1989.

Marcel, Gabriel. The Mystery of Being. Translated by G. S. Fraser. South Bend: St. Augustine ’ s Press, 2001.

Marcel, Gabriel. Homo Viator: Introduction to a Metaphysics of Hope. Translated by Emma Craufurd. New York: Harper & Row, 1962.

Rahner, Karl. Foundations of Christian Faith: An Introduction to the Idea of Christianity. Translated by William V. Dych. New York: Crossroad, 1978.

Rahner, Karl. Hearers of the Word. Translated by Michael Richards. New York: Continuum, 1994.

Balthasar, Hans Urs von. Theo-Drama: Theological Dramatic Theory. San Francisco: Ignatius Press, 1990.

Guardini, Romano. The Lord. Chicago: Regnery, 1954.

聖書研究資料

head

Brueggemann, Walter. The Message of the Psalms: A Theological Commentary. Minneapolis: Augsburg Publishing House, 1984.

Childs, Brevard S. Isaiah. Louisville: Westminster John Knox Press, 2001.

Goldingay, John. The Message of Isaiah 40–55: A Literary-Theological Commentary. London: T&T Clark, 2006.

Wright, Christopher J. H. The Mission of God: Unlocking the Bible ’ s Grand Narrative. Downers Grove: IVP Academic, 2006.

著者による省察資料

head

Oman, Martin. The Day of Days: Pencarian Eksistensial Manusia dalam Terang Matius 7:7.
聖書神学的省察原稿。

脚注

1. マタイ7章7節は本稿の主要な基礎である。イエスの「願う、探す、門をたたく」という言葉は、人間と神との関係の動きを表す。これら三つの行為は、人間が自己認識だけで止まらず、神との出会いへ向けられていることを示す。

2. The Day of Days（Hari Segala
Hari）は特定の日付を指すのではなく、人間が存在を神秘と召命として自覚する実存的経験を指す。

3. homo quaerens（探し求める人間）という概念は、探求が人間の最も深い構造の一部であることを示す。人間は意味と、自分を超えるものに開かれているために探す。

4. イザヤ9章6節にはאֲבִיעַד（’ă ḇî-‘ aḏ）というヘブライ語があり、一般に「永遠の父」と訳される。これはメシア的称号の文脈に現れ、神の支配と救いの働きの性格を示す。

5. ヘブライ語研究では、 ’ abまたは ’ aviは父を源、養い手、保護者として理解する概念と関係し、 ‘ adは継続すること、永遠を指す。

6. 本稿でのAbi Adの使用は、人間の探求の究極的目的として神を理解する聖書神学的省察である。それは、永遠で人格的な神についての聖書全体の証言との関連で理解される。

7. 詩編90編は本省察の人間論的基礎を与える。人間は死すべき存在であるが、神が代々の避け所であるため、有限性が終わりではない。

8. 詩編90編12節の「日々を数えることを教えてください」という祈りは、人生の限界への自覚が絶望ではなく知恵へ導くべきことを示す。

9. キルケゴールは、人間が神の前に一個人として立つとき、自分自身を完全に見いだすことを強調する。人間の存在は一般的カテゴリーだけでなく、神との人格的関係によって理解される。

10. 『Fear and Trembling』において、キルケゴールは信仰を、全人格を神の前に参与させる実存的関係として描く。

11. ガブリエル・マルセルは「問題」と「神秘」を区別する。人間存在は解決すべき客観的問題ではなく、人間全体を巻き込む神秘である。

12. マルセルにとって希望は単なる心理的楽観ではなく、人間の能力を超える神の現存と働きへの開かれである。

13. カール・ラーナーは人間を超越論的存在、すなわち根本的に神へ開かれた人格として理解する。人間はみ言葉を聞く者（Hearer of the Word）であり、神の啓示を受け取る能力を持つ。

14. ラーナーの思想は、人間の神への探求が、先に人間へ自らを開かれる神への応答であることを深める。

15. 著者の省察では、人間は方向のない答えを探して迷う存在ではなく、自らの存在の源へ帰るよう呼ばれた存在である。

16. イザヤ9章6節とマタイ7章7節の関係は本稿の中心である。人間は扉をたたき、永遠の父として示される神がその扉を開かれる。

17. 実存哲学と聖書神学との出会いは、信仰を哲学に置き換えるためではなく、人間の存在経験を神についてのより深い理解へ導くためである。

18. 本稿の中心的結論は、人間が存在の充満を自分自身の中ではなく、生命の源、養い手、究極の目的である神との関係の中に見いだすということである。